

## 『マンズフィールド・パーク』：受動性の勝利

*Mansfield Park* : Passivity Rewarded

入野 賀和子

Kawako Irino

「でも、ファニーはどこにいるのかい？」エドモンドもサー・トマスもしばしばファニーの姿を求めてこう尋ねる。女主人公でありながら、これほどまでに密やかで、常に場面の奥に追いやられ、存在感の薄い登場人物も珍しいのではないだろうか。しかも軽やかでものおじしない、澁刺としたエリザベス・ベネットや、自信満々で歯に衣着せぬ言動が時に周囲の者を困惑させてしまうエマ・ウッドハウスといった活力に満ちた女性像を提示しているジェイン・オースティンの作品にあって、そのような女主人公たちとはまるで対極に位置するかのようと思われるファニー・プライスが登場する『マンズフィールド・パーク』(1814)は幾分異色の作品とすることができるだろう。

オースティンは『自負と偏見』(1813)出版直後に、姉のカサンドラ宛に書き送った手紙の中で、「今私は別のものを書こうとしています。それは全く違った主題のもの、聖職叙任の話になるでしょう」<sup>(1)</sup>と、『マンズフィールド・パーク』について言及している。またこの作品を読んだ兄ヘンリーの感想として、同じくカサンドラ宛の手紙の中でオースティンは、「彼はこの作品が他の二作品(『分別と多感』及び『自負と偏見』)と非常に異なっていると言っていますが、劣っているとは少しも思っていないようです」<sup>(2)</sup>と伝えている。オースティンは『マンズフィールド・パーク』を書くに当って、明らかにそれまでの作品とは違うものを目指しており、また実際にそれを読んだ周りの人々も彼女の作風がかなり違ってきていることを認識している。『マンズフィールド・パーク』を執筆したのはオースティンが36歳から38歳にかけての頃であり、何度か書き直しがなされたとは言え、20代前半の創作である前三作品との間に大きな変化が生ずるのも当然なことであろう。『自負と偏見』が実際に出版されたとき、オースティンは38歳になっており、自作品に対する愛着の念と共に一方では、「幾分軽快で明るく、輝きすぎていて、陰影に欠けるところがある」<sup>(3)</sup>という思いを抱かせたのも、執筆から出版までの間に流れた十数年の歳月の重みが言わせた言葉とも取れよう。そして『マンズフィールド・パーク』は、この思いが作品に持ち込まれたかのように軽快な調子が抑制され、陰影に富む作品となっている。

『マンズフィールド・パーク』が出版されたとき、オースティンは『エマ』(1816)の出版時に抱いたような「良識の点で劣っていると思われるのではないか」<sup>(4)</sup>という危惧の念とは無縁だったと思われる。『エマ』に対して彼女が抱いていた危惧の念は、それまでの伝統的な女主人公像から大きく外れる、いささか大胆とも思えるほどの率直さをもつ生意気な女主人公として登場するエマが、果たして読者から好意的に受け入れられるだろうかという思いからきていた。しかしオースティンが『マンズフィールド・パーク』の女主人公として選んだのは、小説

の主人公としてはある種典型的とも言える伝統的タイプの女主人公である。貧困ゆえに金持ちの親類の元に引き取られるファニーは、弱々しく、物静かで、控え目、しかもいつも何かに怯えておどおどしている。虚弱であることもまたオースティンの女主人公の中では異色の存在である。3マイルものぬかるんだ道をものともせず姉を見舞う、健康そのもののエリザベスの行動力は、ビングリー姉妹には女性にはあるまじきはしたくない振舞と映る。それに比べてファニーは日差しの中を少し歩いただけで、頭痛が起きてしまうような虚弱ぶりである。しかしオースティンと同時代の読者たちにとっては、18世紀的小説の伝統を受け継ぐ、物静かで受動的で慎ましやかな女主人公の方が小説の主人公としては馴染み深いものであったであろう。オースティンにとって、常に一步引いたような慎ましいファニー像は、一般読者には抵抗なく受け入れられるとの計算もあったものと思われる。

オースティンは小説を書くに当って、先輩作家たちの作品を楽しみながらも、その不自然さを揶揄しつつ彼女なりの創作態度を各作品の中で表明している。キャサリン・モーランドは美德の鑑のような女性像に対抗するかのようになり、取り立てて言うほどの取り柄もない平凡な娘として登場するし、エリザベス・ベネットは逆に慎ましやかな女性像を笑い飛ばすかのようになり、生きのいい女主人公である。そのようなオースティンであるならば、物静かで従順なファニー・プライスを作り出すに当ってもそこには何らかの計算が働いていると考えるのは自然なことではないだろうか。ほとんど孤児同然に金持ちの親類に引き取られる女主人公という、一見すると18世紀的小説のある種典型的な物語の設定を借りながら、オースティンはそれに彼女なりのひねりを加えようとしたのではないだろうか。威勢のいい皮肉や軽快さを抑制し、「『自負と偏見』の半分も愉快とは言えない」<sup>(5)</sup> ような『マンズフィールド・パーク』において、オースティンは女性の自己認識という彼女が一貫して描いているテーマをそれまでとは違った角度から掘り下げようとしている。しかもこの作品には、他の作品にもまして self-knowledge や good principles といった言葉が頻繁に出現する。オースティンはこの作品で自己認識の根本土台に必要な、行動の規範となるべきモラルを真っ向から取り上げているように思われるのである。

1

『マンズフィールド・パーク』は、人生の一大事業である結婚における偶然についての一考察とでも言える皮肉な一節で始まる。三姉妹のうち、次女は幸運にも准男爵の目に止まり豪勢な結婚生活に乗り出し、長女は同じく幸運を狙ったが思い通りには行かず、妹の夫である准男爵の友人の牧師に「やむなく愛情を寄せる」こととなり、三女はこれ以上ないほどの運の悪さで所謂「文無し結婚」という籤を引いてしまう。からかいに満ちた導入部であるが、結婚生活の幸不幸がいかに紙一重で危ういものかということが、親の世代の結婚を通して示される。しかもここで槍玉に上げられているのは明らかに、経済的基盤を伴わない結婚の愚かさ、無分別さである。特に次女と三女のそれぞれの結婚は、彼女たちのその後の人生に天と地ほどの境遇の違いを引き起こし、所属する社会階級までも異なるものにしてしまう。しかも彼女たちの選択の結果が子供たちにまで多大な影響を与えることになる。

無分別な結婚の結果として陥った子沢山のプライス家の経済的窮状を救うために、ファニーがバートラム家に引き取られたのは、彼女が10歳のときであった。ファニーは、雑然とした

ポーツマスPortsmouthの港町から、ジェントリー階級の田舎のお屋敷という全く異質の世界へと突然連れ出される。マンスフィールド・パークと呼ばれる屋敷の中で、彼女はそれまでの自分を全て白紙に戻さざるを得ない。サー・トマスによって象徴される伝統的なジェントリー階級の価値観を前にしては、ポーツマス風な考え方はその存在価値さえ認められないほど、無意味なものでしかなく、従ってバートラム家の人々にとって、そのような環境で育ったファニーは無知な人間以外の何者でもない。内気で、無口な「あまり見込みがありそうには見えない」ファニーに対して、ジェントリー階級が信奉する秩序、正当な権威の尊重といった伝統的価値観に基づいた教育が施される。しかしファニーの立場はあくまでもあいまいなものであり、ファニーとバートラム家の娘たちとの間には明確な境界線が引かれている。サー・トマスはこの微妙な区別立ての難しさに触れ、ファニーへの誠実な対処を望みながらも、それでも「あの娘たちは同等には成り得ないのです。身分や財産、権利や将来の見込みはどこまでいっても同じことにはならないのです」<sup>(6)</sup>と語っている。確固たる自らの拠り所となる場所を持たないファニーの無所属性つまり、ジェントリー階級の正当な構成員とはなり得ない身分のあいまいさが、ファニーを脇に追い遣り、常に傍観者としての役割を担わせることになるのである。

ファニーの道徳心の育成の両翼を担うのがエドモンドとサー・トマスである。しかもこの二人のとり手手段は対照的な効果を与える。エドモンドは、オースティンの作品に登場する典型的な男性主人公として、ファニーの道徳的教育者としての役割を担わされている。思い遣り深く、兄のように常にファニーを見守る従兄のエドモンドは、その優しさによってファニーの尊敬と信頼を勝ち得る。キャサリン・モーランドと同じく自分の判断力に自信の持てないファニーは、エドモンドの判断に全幅の信頼を寄せる。一方サー・トマスは善意に満ちてはいるが、それ以上に厳格な家父長的権威でファニーを威圧しながらマンスフィールド・パークが象徴する伝統的価値観を植え付ける。ファニーの常に正しくありたいと願う気持ちの裏には、サー・トマスから非を咎められることへの恐怖心が存在する。ファニーがヘンリー・クローフォードの求婚を拒絶したとき、それを知ったサー・トマスがファニーの部屋を訪れる場面がある。

…突然規則正しい足音が聞こえた。重々しい足取りで、家のこのあたりではめったに耳にしない足音である。それは叔父の足音だった、彼女には叔父の声と同じ位馴染みのある足音だった。彼女はしばしばその音に震え慄いたものだった、そして話の内容が何であれ、叔父が自分に話があって来ているのだと思うと再び震え始めた…この部屋へ叔父が以前、時折訪れたときの恐怖が甦ってくるように思われ、彼女は再びフランス語や国語の進み具合を叔父に試験されようとしているような気持ちがしてきた。(282)

確かにファニーは決して過ちを犯さない志操堅固な女性である。しかしその堅固さの背後には峻厳なサー・トマスの姿が見え隠れする。ファニーが従姉のマライアやジュリアと大きく違うのは、彼女がサー・トマスに対して抱いている畏怖の念である。ファニーは一見完璧な美德そのものの女主人公のように見えるが、その美德の背後には愛情への渴望や抑圧される者が持つ怒りや悲しみが隠されている。その意味で、オースティンはファニーを決して非の打ち所のない美德そのものの女性には仕立てていないのである。ファニーの行動基準の根幹には、彼女自身の道徳心と共に、サー・トマスの意向への考慮が彼への恐怖感と共に常に働いているのである。サー・トマスが財産管理のために自ら西インド諸島のアンティガ島に出向かざるを得なく

なったとき、ファニーはマライアやジュリアと同じように内心解放感に包まれるが、一方で大変な困難を伴うであろう彼の身の上を思い遣っても悲しい気持ちになれない自分自身の方を悲しがってみたりと、ファニーの人物造型には明らかにオースティンのひねりが感じられるのである。

2

サー・トマスと入れ替わるようにラッシュワースやクローフォード兄妹がマンズフィールド・パークに現れて、新しい展開が始まる。21歳になったマライアは、年収1万2千ポンドのラッシュワースとの結婚を「道徳的責務」と考え、当り前の如く婚約を取り結ぶが、サー・トマスが留守のマンズフィールド・パークは全く異質のロンドンの価値観を体現する新しいタイプの人間によって、大きく揺るがされることになる。クローフォード兄妹は摂政時代の風潮そのものと言えるような、軽やかで洗練されていて、機知に富む人物である。自然よりは人間そのものに興味があり、常に新奇な物や刺激を追い求めている。そのような彼等の価値観はマンズフィールド・パークが象徴する秩序や安定、調和といった伝統的価値観に真っ向から対立するものである。変化に乏しい生活を送ってきたバートラム姉妹にとっては、クローフォード兄妹が持ち込んだ世界は目新しさと活気に満ちている。

クローフォード兄妹の出現はファニーに対しても大きな変化をもたらす。ファニーの唯一の心の支えであったエドモンドがメアリに関心を寄せ始め、彼女は嫉妬心にさいなまれる。バートラム姉妹やクローフォード兄妹との会話に加わることもなく、彼等の話しや振舞をただ黙って観察しているファニーの物静かな外見とは裏腹に、彼女の心の奥底では彼等への厳しい批判が渦巻いている。特にメアリに対しては、エドモンドへの激しい想いがある分だけ、その批判は激烈である。馬での遠出や舞踏会といった華々しい社交生活がバートラム姉妹やクローフォード兄妹の意味する生活であるとすれば、ファニーの本当の生活は彼女の心の中の感情世界にある。「私は無口ですけど、目が見えないわけじゃありませんわ」(330)というファニーの訴えは、彼女の外面と内面の生活の落差がいかに大きいかを物語るものである。ファニーは、メアリの無責任で軽薄なところのある性格を決して忘れることができない。

ファニーはエドモンドが毎朝牧師館に行くことを不思議だとは思えなかった。招待なしにこっそり行ってハーブの演奏が聞かれるものなら、彼女だって喜んで行ったことだろう。夕方の散歩が終わって二つの家族が別れるとき、クローフォード氏はバートラム家の姉妹にかかりっきりになっているものだから、彼がグラント夫人とその妹を家まで送っていくのを当然と考えているのも、彼女には不思議とは思えなかった。しかし、彼女はこれをとてもし割に合わない取り替えだと思ったし、もしエドモンドがそばにいて彼女のために葡萄酒を水で薄めたものを作ってくれないのなら、そんなものは飲まないほうが良かった。彼女は彼がそんなに多くの時間をミス・クローフォードと過ごしながらか、彼がすでに気付いていた欠点の類も余り目に入らないでいることに少し驚きを覚えていた。彼女のほうは、ミス・クローフォードといるといつでもなにかしら同じ類の欠点を目の前に突き付けられている思いがしているのに、エドモンドはそうではなかったのだ。(59)

ヘンリー・クロフォードがラッシュワースの屋敷であるサザトン・コート庭園に改良を加えようとするエピソードは、ロンドンの価値観が伝統的価値観に変革を挑むという点で大変象徴的である。しかしこのエピソードは結局実現することはない、この計画に参加した人々の利己的な欲望を顕にただけであった。ヘンリーの挑発に乗るようにマライアはラッシュワースを出し抜いて鍵の掛かった門の端をくぐり抜け、囲い込みのされていない広々とした野原へと二人だけで勝手に歩き出し、ジュリアとラッシュワースが無視された怒りを抱えてそれぞれ後を追いかけることになる。鍵の掛かった鉄の門は、ロンドン生活に憧れるマライアにとっては「束縛と苦痛」を意味するものでしかないが、ラッシュワースが属する伝統的価値観の世界では、「権威と保護」を象徴するものである。一方エドモンドはメアリ・クロフォードに誘われるように森の中へと入っていく。それぞれが思惑を抱えて勝手に動き回る中で、脆弱なファニーはこの「権威と保護」を象徴する鉄門の前のベンチに一人取り残され、氣遣いげに彼等の行動を見守るだけである。この二つの価値観の対立は、素人芝居のエピソードでより鮮明に描かれる。

クロフォード兄妹よりも、もっと軽薄で社交界なれしたイェーツがマンズフィールド・パークに持ち込んだ素人芝居熱は、サー・トマスの屋敷に舞台をしつらえるために手を加えるという目に見える改変をもたらす。しかもサー・トマスの書斎というマンズフィールド・パークの秩序と権威を象徴する部屋を楽屋にし、混沌と喧噪の場へと変えてしまうのである。幻に終わったサザトン・コート改良の計画は、言わばマンズフィールド・パーク改良の序幕に過ぎず、素人芝居のエピソードによりクライマックスを迎える。素人芝居用の脚本として取り上げられた『恋人たちの誓い』は、エリザベス・インチボールドがドイツ人劇作家のものを翻案したもののだが、オースティンはこの劇を登場人物との関連で二重、三重に効果的に利用している。オースティンの甥も述べているように、彼女自身も含めて一家で素人芝居を楽しむ程演劇に親しんでいたことから、オースティンが家庭で劇を上演すること自体を不道徳と考えていたのではないことは明らかである。<sup>(7)</sup> オースティンはこの作品の中で素人芝居のエピソードを彼女の描き出す登場人物の倫理性を試す試金石として用いたのであり、オースティンの個人的な好みとは切り離して作品の中の一つのエピソードとして捉えるべきであろう。さらに続けて彼女の甥が、『マンズフィールド・パーク』の素人芝居の場面で大層生き生きと描かれているいくつかの事件や気分は、彼女自身のこれらの余興の思い出を基にしているという推測も当然成り立つのではないだろうか<sup>(8)</sup>と述べているように、たった一人の傍観者としてファニーがふと感じてしまう妬ましさと芝居への期待感、確かにオースティン自身の経験と重なり合うように思われる。さらに付け加えれば、オースティンは当時大変な人気を博していたインチボールドによる『恋人たちの誓い』を、メアリが演じるアミーリアの台詞を実際に引用したり、ラッシュワース演じるカッセル伯爵の台詞の数が実際に42あることを述べる程にこの劇を熟知し、楽しんでいたものと思われる。<sup>(9)</sup>

バートラム姉妹やクロフォード兄妹は熱狂的に芝居への参加を表明するが、エドモンドは反対し、ファニーは不安にかられる。エドモンドとファニーが問題にしたのは、そのような行動がサー・トマスの意向に反するばかりか、自分たちの楽しみのみを優先することは、家を留守にせざるを得なかったサー・トマスに対する配慮にも欠けた行為だという思いがあったからだ。そしてサー・トマスに敬愛よりは畏怖の念を抱いているファニーにとっては、彼の意向を無視するような行動は何よりも避けるべきことであった。しかしエドモンドの反対は一顧だに

されず、計画が進められる。傍観者として最初ファニーは、脚本選びや配役の決定を巡っての騒ぎを幾分面白がりながら眺めている。彼等を突き動かしている身勝手さや嫉妬が勿体振った物腰や言い訳の衣を着けて喜劇さながらファニーの前で演じられる。ファニーは、彼等が選んだ脚本の内容の不穏当さに驚くが、エドモンドがメアリと一緒に演じる魅力に負けて劇に参加することを知ったときの驚きは言葉では言い尽くせないものがある。エドモンドの翻意にファニーは怒りにも似た気持ちを抱く。

…演じることになったですって！あんなに反対した後なのに、あんなに正しく、公然と反対したのに！彼が考えを述べるのをこの耳で聞き、彼の様子をこの目で見て、彼のことは自分にはすっかり分かっていると思っていたのに。こんなことってあるだろうか、エドモンドにこれ程までも一貫性がないなんて。彼は自分自身を欺いているのではないだろうか。彼は間違っているのではないだろうか。ああ！何もかもミス・クローフォードのせいだわ。  
(141)

あくまでも劇への参加を拒んだファニーだが、彼女の決意とは裏腹に疎外感と嫉妬心に苦しめられる。表面上は超然と道徳的な優位性を維持しながら、心の奥ではそのような道徳的優位性の代償として経験する疎外感に苦しむ。周囲の人が皆、陽気に忙しそうに相談したり、笑いあったりしている中で、自分だけが無価値な人間として取り残され、完全な仲間外れの状態に置かれていることへの苛立ちは、メアリ・クローフォードに対してより激しい怒りとなって向けられる。メアリが「陽気な表情でやって来ると、それは侮辱に思え、親しげな言葉で話しかけられても、平静に答えられない」(143)ほどファニーは動揺する。そのようなファニーの葛藤をオースティンはあますところなく描き出す。

ここで『恋人たちの誓い』が問題視されているのは、この劇の中に正式な婚姻によらず生まれた私生児の問題と、若い女性の側からの恋の告白への誘導という、正当な権威や秩序を重んずる伝統的価値観に真っ向から挑戦するような筋の展開が持ち込まれているからである。帰国したサー・トマスが、彼の目に触れるこの劇の脚本をことごとく焼き捨てたことは大変象徴的である。『恋人たちの誓い』の主題もまた結婚である。劇の前半は男爵に誘惑され捨てられた女性と、生き別れになっていた息子との再会が中心になっている。母親と息子の再会も、ヘンリーとマライアが演じれば彼等の隠された欲望実現の格好のはけ口となり、親子の形を借りての恋の語らいの場を提供することになる。つまり二人とも演じることで架空の世界と現実との混同が起こり、特にマライアは、婚約者のラッシュワースではなくヘンリーがマンズフィールド・パークからの真の救出者となるのではないかと密かに期待を抱き始める。サザトンの鉄門でのヘンリーの誘いかけ、演技という口実での恋の語らいと、同じパターンを繰り返しながら危うさを増していくマライアとヘンリーの恋の戯れは、最終的には二人の駆け落ちという悲惨な結末を招かずにはおかないものである。

「アミーリアの部分が、私が特に懸念し改変を加えた個所でした。原作者が彼女に与えた立場は同じですが、彼女の台詞はほとんど全て変えました。原作の中で彼女が恋人に愛を告げる生意気であからさまなやり方は、イギリスの観客には不快なものでありましょう」と、インチボールドは『恋人たちの誓い』の脚本出版に当たっての序文で述べているが、<sup>(10)</sup>このアミーリアと恋人の牧師アンハルトをメアリ・クローフォードとエドモンドに演じさせることで、非常に

効果的にこの劇が利用されている。

メアリ・クローフォードはマンスフィールドに現れたときから、「有利な結婚」が彼女の人生の目的であることを公言して憚らない。結婚は「相手から最大のものを期待しながら、自分自身が一番不正直に振る舞う」(40)という「駆け引きを伴う取引」だと主張する。全てが金銭で解決されるという「本物のロンドン式処世術」を身につけたメアリは、当然ながらパーラム家の長男トムに目標を定める。しかしオースティンはメア리를単なる野心家には描いていない。機知、美貌、気立ての良さ、輝くばかりの健康美、快活さ、しかも人の心を読める共感力にも富む魅力溢れる人物として描かれ、ファニーよりもはるかにオースティンの女主人公らしい資質を兼ね備えている。ファニーの道德心の教育者でもある生真面目なエドマンドの魅力を確認できる理解力も持ち合わせており、エドマンドが彼女に眩惑されるのに十分な魅力を持った人物として描かれているのである。しかし同時に宗教心や義務感といったエドマンドやファニーが信奉するジェントリー階級の伝統的価値観を軽視し、からかいの種にしようとする。メアリにとっては、エドマンドが就こうとしている牧師という立場は、弁護士や軍人と同じく単なる職業選択上の選択肢の一つでしか有り得ないし、しかも一番無価値で無意味な職業でしかない。「先生は、生まれや財産は取るに足らない物であり、幸福を与えることはできないと、いつも私におっしゃっていますわ」<sup>(11)</sup>と父親から持ち出される結婚話に無関心である一方で、牧師でもありアミーリアの家庭教師でもあったアンハルトを積極的に愛情告白へと誘導していくアミーリアをメアリが演じることに対する巧妙な皮肉がある。メアリもエドマンドもヘンリーとマライアと同様に、彼等の現実から遊離した仮想現実の願望の中に入り込み、演じることを願望充足の代替行為へと変容させてしまっているのである。そして伝統的価値観を守る側の人間として一人取り残されていたファニーが、用事で来られないグラント夫人の代わりに芝居に加わるように強要され、まさに屈服しかけたそのとき、サー・トマスが突然帰宅し魔法が解けるようにロンドンの価値観からの脅威がマンスフィールド・パークから一掃される。

ヘンリーもメアリもそれぞれ十分魅力的な人物として描かれているが、一方で物質的豊かさが人生の全てを計る尺度とされ、絶対的価値観を持つことができない人間の危うさを漂わせている。だからこそヘンリーやメアリの中に、彼等には無縁な確固たる価値観に基づいた行動規範への憧れが存在するのである。メアリは、彼女の世俗的欲望や野心にも係わらずエドマンドを容易に諦め切れなかったし、ヘンリーはファニーの頑固なまでの公正であることへの固執や誠実さに惹かれたのである。トリリングは『自負と偏見』と『マンスフィールド・パーク』を比較して次の様に述べている。

…その作品(『自負と偏見』)は、元気の良さや活発、機敏、軽快さと言った特性を讃え、それらの特性を幸福と美德に結び付けている。その社会的信条は寛容なものであり、少なくとも「良き」人はその人自身の持っている本質に基づいて定義されるべき権利を持つと主張している。その作品は許しへの衝動によって生き生きとしたものになっている…ほぼ反対のことが『マンスフィールド・パーク』については言える。この作品の持つ衝動は許すことではなく、断罪することである。この作品が讃えているのは、社会的自由ではなく社会の静止状態である。元気の良さや活発、機敏、軽快さが作品の中に十二分に持ち込まれているが、それはただそのようなものが実は良き生活の妨害物となるだけではなく、美德や幸福とは何の関係もないものとして拒絶するためにのみ持ち込まれているのである。<sup>(12)</sup>

ヘンリーやメアリは、相手の性格に合わせて自在に自己を調整できる器用さを持っているし、彼等は性格を読む達人でもある。彼等は様々な階級、職業の人間が寄り集まった大都会ロンドンの中を軽やかに泳ぎ回ってきた人間である。そのような都会では機知に富んだ会話や軽快さが何よりも尊重される一方で、絶えず目新しさや刺激が求められる。自らを振り返ることなく流されていく彼等が生きている相対的価値観の世界が、ファニーやエドマンズの頑固なまでの保守性や彼等が体現している絶対的価値観と対比された場合、不誠実で無責任なものとして明確に退けられているのである。クローフォード兄妹は、オースティンの時代以降急激にその数を増していく、言わば現代人の原形そのものとも言えるタイプの人間である。肥大化していく都市が大衆を飲み込み、行動規範となるべき絶対的価値観を否定し貪欲に飲み込んでいく。『マンズフィールド・パーク』には、サー・トマスが象徴するジェントリー階級の伝統的価値観も、圧倒的優位を誇る大都会の相対的価値観を前にしてはその力を失いつつあることへのオースティンの危機感が明確に描かれている。そしてこの作品では「牧師」が、「個人として、あるいは全体としての人類にとって現世においても永遠においても一番重要なこと、つまり宗教と道徳、さらにこれらの影響力の結果である風俗を守ることを託されている」(83)ものとして、伝統的価値観のひとつの象徴として描かれているのである。エドマンズがメアリに牧師本来の使命を果たすことは、もはやロンドンでは困難になりつつあることを話す場面がある。

「…最上の道徳心は大都市では見つかりません。どのような宗派であろうと立派な人が最も役に立つことができるのは大都市ではありません。また牧師の影響力が一番感じられるのも大都市ではないのです…良い牧師が彼の教区や近在で役に立つのは立派な説教によってだけではないのです。そのような教区や近在は牧師の個人的な人柄を知り、その行動全般を観察できる規模にあるのですが、ロンドンではめったにそういうことはないでしょう。ロンドンでは牧師は教区民の群集の中に埋もれてしまいます。大多数の人には牧師は説教師としてしか思われていないのです。」(83-84)

牧師が大衆の波に飲み込まれてその存在意義が失われつつあるように、ジェントリー階級の伝統的価値観も確実に浸食されている。都市と田舎という対立の構図は、オースティンが好んで取り上げている主題だが、この作品では活力に満ちてはいるが無責任で無節操な都市に対する拒絶の姿勢が明確に表明されている。トム・バートラムの健康を損い、マライアやジュリアを誘惑し無鉄砲な行動に走らせたのも、都会の申し子とも言うべきクローフォード兄妹を生み出したのも、全て大都会ロンドンなのである。

3

サザトン訪問や素人芝居のエピソードは、徐々に程度を増しながらロンドンの価値観が伝統的価値観を浸食していく過程を描いたものではあるが、ファニーに関して言えばあくまでも傍観者としての立場に置かれ、その浸食過程を不安げに眺めているだけであった。しかしヘンリーの気紛れから始まったファニーへの求婚は、彼女を人生の傍観者から選択者の立場へと転換させる。人生の岐路に立たされた若い女性の苦痛、特に結婚という生涯でただ一度の選択を迫られる立場に置かれた女性の不安や苦痛は、女性作家たちが好んで取り上げた主題であり、ファ



ニー・バーニーも可能性が閉ざされたような狭い選択肢の中から選ばざるを得ない状況に追い遣られた女主人公の苦悩を繰り返し描いている。しかしファニーは結婚という選択の場に立たされたとき、彼女の決断は大変明快であり終始一貫揺らぐことはない。その意味において、ファニーはオースティンの作品に登場するエリザベスやエマといった、自分の考えを明確に主張する他の女主人公と同じ延長線上にある人物である。外面の無口さとは裏腹にファニーの感情生活の激しさは、周囲の驚きをもものともせず遠慮会釈なくやりこめるエマの威勢の良さと表裏一体のものと言える。ヘンリーのバートラム姉妹への不誠実な振舞を何度も目にしていた観察者としてのファニーが、彼の無節操ぶりを非難するその激しさはメアリに対する非難に通ずるものがある。ヘンリーがファニーもマライアやジュリアと同様な性格の持ち主と思い込み、彼女の歡心を買おうと愛想良く素人芝居の思い出を持ち出す場面がある。

「あれは夢、楽しい夢のようです！…あの時の芝居のことはこれから先もきっと実に楽しい気持ちで思い出さることでしょ。あんなにも面白く、活気があり、熱気で一杯でした。誰もがそう感じていました。みんな生き生きしていました。朝から晩までやることがあり、希望や心配があり、せわしげに動き回っていました。いつも何かしら解決しなければならぬ、ちょっとした反対や迷い、不安がありました。あんなに楽しかったことはありませんでした。」

口には出さないが、怒りを覚えながらファニーは心の中で繰り返していた。「あんなに楽しかったことはなかったですって！正当化できないと分かっているはずのことをしておきながら、あんなに楽しかったことはなかったですって！あれほどまでに恥ずべき、思い遣りもない振舞をしておきながら、あんなに楽しかったことはなかったですって！まあ！なんて腐り果てた根性をしているのでしょうか！」(203)

ファニーは彼女の怒りの気持ちを決して表に出すことはないが、心の中では激しい非難が渦巻いている。ファニーはオースティンのどの女主人公にも負けないほど、好悪の感情が激しい人物である。しかしその一方で彼女の心の奥に常に存在する愛情への渴望が、彼女に示される愛情に対してはどれほど些細な愛情であっても大変敏感に熱烈に反応させるという面も合わせ持っている。だからこそあれほど批判的な目で見ているメアリに対しても、彼女が叔母のノリス夫人の悪意に満ちた叱責からファニーをそれとなく守ってくれたり、兄のウィリアムからのプレゼントである琥珀の十字架を身に着けられるようにとネックレスを用意してくれたときには、メアリが「本当の友人」のように思えて彼女への気持ちも和らいだりするのである。しかしヘンリーがファニーの兄ウィリアムの昇進に尽力してくれた話の後に、まるでその尽力と引換えのように彼女に求婚するときの彼女の反応は、より手厳しく容赦のないものである。ファニーの心の中では、兄のことを思い感謝と喜びが、動揺や惨めさや怒りと混ざり合い混乱の極にありながら、同時にヘンリーに対して、「それが彼のいつものやり方なのだ、彼のすることと言ったら、いつも何かしら不快なことが混ざっているのだ」(274)と、厳しく断罪する。

ヘンリーは素人芝居の稽古では他の誰よりも巧みな演技者であり、また朗読においても際立った才能を発揮する。彼は王であれ、女王、家臣であれ、思いのままにそれぞれの人物になりきり、威厳や誇り、情愛や後悔、どのような感情も巧みに劇的に表現してしまう才能を持っている。「演じる」ことで、彼は様々な人間に変容し異なる人生を擬似体験することができる

わけであり、彼が常に追い求めている変化と新奇さを手に入れることができるのである。しかし巧みに自分を演じ分け、相手に合わせて対応を変えるヘンリーの器用さは、ファニーには彼の不誠実さ、無節操の現れとしか見えない。「自分は全ての人にとって一番大切な存在、自分にとって他は皆取るに足らぬ人間」(277)と考えるようなヘンリーの自己本位さが、ファニーの不信感を募らせるのである。ファニーは芝居に参加するよう求められたとき、「私は世界を与えと言われても、何かを演じるなどということはできませんわ。ええ、本当に私にはできませんわ」(131)と答えるが、頑なまでに自分自身であることにこだわるファニーと際立った対照を示している。確固たる自己を持たないヘンリーはその場その場の状況と相手に応じて、洗練され機知に富む都会的な恋人から真摯な恋人まで、結局はその形だけを演じているにすぎないのである。ヘンリーはファニーが本物の感情を持てる人間であることを理解できる判断力がありながら、彼の情熱は気紛れで、目の前に見えなくなると容易にその対象を取り替えてしまうほど脆いものである。ヘンリーがファニーに固執するのは、彼女が彼からの誘い掛けに全く応じず、あくまでも彼の求婚を拒み続ける姿勢に彼の征服欲がかき立てられたからに過ぎない。ファニーがヘンリーに抱く不信感は、彼が行動規範となるべきモラルを持たず、己の欲望のみに突き動かされて生きる人間であることを見抜いていることからきている。ファニーは、結婚において財産や身分を重視する世間智そのものとも言えるサー・トマスと初めて対立することになるが、ファニーは財産や身分といった社会的条件には一切関心を払わないという点で、オースティンの女主人公の中ではかなり異質な存在である。ある意味で『マンスフィールド・パーク』は、バートラム家やクロウフォード兄妹が象徴する物質的豊かさの世界とファニーが象徴する精神世界との相克が主題になっているとすることができるであろう。

サー・トマスは彼の信奉する伝統的価値観から見れば、ヘンリーのファニーへの求婚は彼女にとってはこれ以上望むべくもないほどの幸運であり、ファニーが受諾するのは当然と考えるが、そのようなサー・トマスに彼女は生まれて初めて自らの意思を表明し、家父長的権威に抵抗する。18歳のしかも常に愛情への飢餓感を内に抱いているファニーにとっては、愛情こそが彼女が人生に求めているものなのである。彼女の愛情への渴望を前にしては、世俗的な富や地位はその存在価値を失ってしまう。サー・トマスは、富裕さの中で暮らしているうちに彼女の「比較し、判断する力がいささか異常を来たした」と考え、富のもたらす安楽に無関心なファニーの「分別の治療」をするために、彼女をしばらく実家に返しその現状を実体験させることになった、とオースティンは穏やかなからかいを込めた調子でファニーが実家に戻るいきさつを述べているが、オースティンのどの作品においても女主人公が視点を変えて外側から自らを見つめ直す過程が、自己認識には必要不可欠なものとして取り上げられている。エリザベスがダーシーと出会うことにより、自分自身の狭い経験範囲から引き出した自らの理解力や判断力の優位性への自信満々な思い込みから覚醒したように、またエマがウッドハウス家の甘やかされた娘から、地域社会の一員としての自らの位置を確認することにより、自己中心的な視点からより成熟した視点へと成長していくように、世間から隔離されいわば純粹培養のように育ったファニーも、もう一度外側からマンスフィールド・パークを見つめ直し、社会の中の一員としての自らの位置を再確認することが必要とされているのである。

ファニーはオースティンの登場人物の中でも、夢想的傾向の強い女主人公である。ファニーは雲一つない夜空の輝きを眺めながら、エドモンドに語り掛ける。

…「ここには調和がありますわ！」と彼女は言った。「休息がありますわ！これを表現することは、絵画や音楽にはとても無理ですわ、詩だけができることですもの。あらゆる気苦労を静め、心を恍惚へと高揚させるものがありますわ。こんな夜を眺めていると、世の中には悪や悲しみなど存在しないのだ、という気分になりますわ。自然の崇高さにもっと目が向けられ、人々がこのような景色を眺めてもっと己を虚しくすることができれば、きっと悪も悲しみも少なくなることでしょ。」(102)

このような夢想家のファニーが、ポーツマスという現実世界の中に放り込まれることで、サー・トマスと言うところの「比較し、判断する力」に修正が加えられるのである。マンスフィールド・パークで常に疎外感を味わっている分だけファニーは、本来の所属場所である実家への思いは熱烈である。彼女は「家族の真ん中において、多くの人から愛され、これまで経験したことのない程みんなから愛され、不安も遠慮もなしに愛情を感じ、周りの人達と対等の気持ちになれる」(336) ことを思い描き、夢心地になるが、彼女の抱いた愛情溢れる理想的家族像への幻想は無残に打ち碎かれる。ポーツマスの実家が表しているものは、喧躁、無秩序、放任、乱雑そのものであり、ファニーが留守にしていた8年間彼女は全く忘れられた存在であったことを思い知らされる。確かにポーツマスにはロンドンのような怠惰や虚飾、無節操といった悪徳は見られないが、困窮がもたらす絶望的な無秩序状態が支配し、妹のスーザンのように良い素質を持っていても、それを引き出し伸ばす術もなく放置されたままに打ち捨てられる。ファニーは生まれて初めて富の威力と価値を認識し、マンスフィールド・パークの象徴する上品さ、規則正しさ、調和、秩序や良識は経済的豊かさなしには存在し得ないことを実感するのである。また突然訪ねてきたヘンリィに、実家の貧しさや、粗野な父親の振舞を恥入る気持ちが働く。不在地主のような無責任なやり方を改め、模範的な地主になろうと努めているヘンリィにこれまでとは違う誠実さを感じ、もし彼の愛情に応えることができれば、妹のスーザンを招いて共に暮らす生活も可能になるのではないかと、思い描いたりするようになる。そしてファニーは、自分が真に所属すべき場所は実家ではなくマンスフィールド・パークであることをはっきりと自覚するのである。8年という歳月が経過するうちに、自分の中にマンスフィールド・パークの体現する価値観がしっかりと根付いていたことを認識するのである。それまでの所属する場所を持たないあいまいな存在ではなく、マンスフィールド・パークの一員であるという自覚が、ファニーの行動をより力強く、より自信あるものに変えていくのである。

劇的な自己認識や覚醒を経験するエリザベスやエマとは異なり、ファニーの自己認識の過程は大変穏やかなものである。ファニーの言動は常に正しく慎ましやかであり、自らの自惚れや高慢さを恥入るような反省を口にするには決してない。しかしいくら志操堅固ではあっても、社会生活なしにはその堅固さは何の意味ももたらさない。一見非の打ち所のないファニーではあるが、オースティンの他の女主人公と同様に現実社会の認識を伴って初めて、ファニーは自己を見つめ直すことができるのである。オースティンは、個人と社会との関係、社会の中の一員としての個の存在、これらの認識なしには自己の成長は有り得ないと考えている。ファニーの自己認識には、いささか夢想的で理想主義的傾向のある潔癖さから、現実社会の世俗性の受容へと、余裕と寛容の姿勢が必要不可欠なものとしてされているのである。

ファニーが自らの拠り所となる場所をはっきりと認識し、理想主義的で観念的な考え方の軌道修正が完了したとき、彼女は再び傍観者の立場に追い遣られる。事件が背後で矢継ぎ早に起

こるが、彼女は次々に送られてくる手紙の読み手の立場に立たされ、ポーツマスの実家でひとり気遣わしげに成り行きを見守るだけである。この一連の事件はファニーをマンズフィールド・パークの正当な住人として、サー・トマスの望む伝統的価値観の真の後継者として迎え入れる環境を整えるための下準備の役割を果たしている。つまりファニーが夢想的な精神主義から現実を凝視した世俗性への歩み寄りを求められるように、身分や財産を重視するサー・トマスの「世間智」自体も大きな試練にさらされ、軌道修正を求められることになるのである。オーステインは、『マンズフィールド・パーク』の中では威勢の良い皮肉や風刺を抑制する傾向にあるが、それでも最も頻繁に穏やかなからかいの対象にしているのは、謹厳実直な家父長のサー・トマスである。そしてそのからかいの種は、余りに世俗的過ぎる彼の世間智に関してなのである。娘のマライアが婚約者のラッシュワースに冷淡であることを見て取り、彼は娘の本心を確認めようとするが、マライアはヘンリーへの当て付けの気持ちからラッシュワースとの結婚への決意をきっぱりと表明する。そのマライアの説明に対するサー・トマスの納得の仕方は、奇妙な逆説に満ちたものである。

…マライアが彼と結婚することの幸せをこれほどはっきりと言えるなら、恋によって盲目になることもなく、恋による偏見もなく自信をもって言えるのなら、その言い分を信じてやるべきだろう。あの子のものの感じ方は多分それほど鋭くないのだろう。そのように見えたことは一度もなかったからな。だがそのことであの子の安楽が減るとも思えない。それに夫が第一級の輝かしい人物でなくても構わないというのであれば、確かにそれ以外のことでは全てあの子に有利だ。気立てのよい娘が恋愛結婚をしないというのであれば、たいていの場合実家の方に愛着を持つものだ。それにサザトンがマンズフィールドに近いことも当然ながら一番の魅力となるはずで、おそらく大層和やかで無邪気な楽しみをたえず与えてくれることだろう。(181)

このようにサー・トマスは、一家にとって大変有利な結婚を彼なりに納得し、破談にならずにすんだことを内心喜んだりするのである。彼は細心の注意を払って娘たちの教育を行うが、彼自身の厳格さが子供たちに上辺だけの従順さを装わせることを身に付けさせてしまうことになる。彼は娘たちに最上の教育を施したつもりでいたが、彼の教育の致命的欠陥は、自己抑制や謙遜、義務感といったより本質的な行動原理に目を向けさせてこなかったことにあると思えるのである。サー・トマスは彼自身の良識が余りに世俗性に染まり過ぎていたことに愕然とし、富や身分も行動規範となるモラルを伴わなければ無価値であると認識を新たにする。サー・トマスの世俗性に染まった世間智からの覚醒の後では、ファニーのマンズフィールド・パークでの地位は揺るぎないものになるのは当然であり、ファニーはマンズフィールド・パーク再生の役割を担うことになる。

タナーが述べているように、この作品は外見的には「何もしないことによって勝利を得る娘の物語」<sup>(13)</sup>である。彼はさらに続けて次のように述べている。「彼女(ファニー)は座り、待ち、じっと耐える。そして最後には結婚によって思いがけず高い社会的地位へと引き上げられるが、それは彼女の活力というよりは途方もないくらいの不動性に対する報酬のように思われる。」<sup>(14)</sup>ファニーは受動性そのものの女主人公であり、行動選択への最終的岐路に立たされたときも、その選択は外的事件により回避される。彼女がグラント夫人の代役で芝居に参加する

ように、エドモンドも含め周りの人々全員から強要されたとき、彼女を救ったのはサー・トマス  
の突然の帰国であったし、ヘンリーからの求婚を拒絶したことへのサー・トマスの非難から  
晴れて解放されるのも、ヘンリー自身がマライアと駆け落ちするという思いがけない展開によ  
るものである。ファニー以外の登場人物がそれぞれの欲望にかられて右往左往するなかで、彼  
女ひとりが道徳的優位性を堅持し、じっと留まっている。しかしその代償は彼女が不当に受け  
る非難や叱責、誤解や無視であり、深い孤独感である。しかしファニーは決して誤った行動を  
することがないという道徳的優位性ゆえに、読者はエリザベスやエマに対するような気楽な共  
感でファニーを受け入れることができにくいこともまた事実である。このような女主人公を称  
して、ファラーは「とりすましたお堅い女偽善者に関して我々が抱いているイメージを最悪の  
形で具現化した人物」<sup>(15)</sup>と言い、またエイミスは「自己満足と自尊心の怪物」<sup>(16)</sup>と手厳しい表  
現で批判している。確かに、受動性を貫くことでその意志を達成するという生き方は、困難に  
自ら立ち向かい解決していくという積極性と比較されるといささか迫力の点で劣ることは否め  
ない。しかしファニーの心の中では、若々しい激しい感情が息づいている。メアリへの嫉妬心  
に苦しみ、またエドモンドからの情愛のこもった一言に「18年の人生の全経験が揺さぶられ  
る」程の幸福感に浸ったりするのである。オースティンはファニーの心の中では18歳の娘ら  
しい感情が、嫉妬や怒り、愛情や喜びや感動が渦巻いていることを十分描き出しているし、全  
く弱点を持たない完璧な女主人公として仕立てていないことは明らかである。

『マンスフィールド・パーク』は、ファニーの受動性、不動性が彼女を取り巻く人々の静止  
状態への忌避や嫌悪と対比されている。ここで描かれているのは、「社会の利己的な駆け引き  
やぶつかり合いの中で真の倫理意識を持ち続けることの難しさ」<sup>(17)</sup>であり、ファニーが絶えず  
さらされる利己的な社会からの説得や抑圧、敵意についてである。このような抑圧に対してファ  
ニーが取れる唯一の抵抗は、寡黙な受動姿勢を貫くことである。ファニーの真価が認識される  
のは、立ち直れない程の大きな痛手を受けたマンスフィールド・パークの住人たちが、彼女の中  
に彼等の苦悩の良き聞き手、良き理解者として全てを受容しようとする彼女自身の本質を見  
出したときである。それゆえ作品の結末は、作者の「まあかなり気楽な状態」で終わること  
にしようという表明にも係わらず、物悲しさが漂うものになっている。

わがファニーがちょうどこの頃、色々なことがあったにも係わらず、幸福だったに違  
ないと思ひ、私は満足している。彼女は、周りの人々の悲しみに同情し、あるいは同情の  
気持ちを感じていると自分では思っていたことだろうが、それでも彼女は幸せな人間だ  
ったに違いない。彼女の中にはひとりで湧き上がってくる喜びの泉があったのだ。彼女は  
マンスフィールド・パークに戻り、みんなの役に立ち、愛されているのだ…確かにエドマ  
ンド自身は幸せからは程遠い状態だった。彼は失望と後悔に苦しみ、これまでのことを嘆  
き、ありえないことを願い、望みを断ちかねていた。彼女にはそれが良く分かっていて悲  
しい気持ちになったが、その悲しみも満足に基づいたもので、安らぎへと向かう、そして  
一番大切な愛しい気持ちすべてと大いに調和した悲しみだったので、そんな悲しみなら、  
最高に陽気な気分であろうと喜んで取り替えようなどと思う人はほとんどいないことだ  
ろう。(420)

ファニーの幸せは、マンスフィールド・パークの住人の多大な苦しみのなかで得られたものな

のである。エドモンドがファニーへの気持ちを妹に対する愛情から妻への愛情へと変容させていくのも、彼がメアリとの別れの苦悩を彼女に語り尽くす過程を通してである。ファニーが手に入れる幸福の背後には、マライアのマンズフィールド・パークからの追放、サー・トマスの心痛と後悔、エドモンドのメアリとの別れなど、苦悩と痛みが隠されている。物語はエドモンドとの幸福な結婚生活を始めたファニーの、喜び溢れるマンズフィールド・パーク礼讃で締め括られている。ファニーの目には、エドモンドと暮らすことになるマンズフィールドの牧師館も「昔からマンズフィールド・パークの視界と庇護の中にあるものは、全てそうであったように、申し分なく完璧なもの」(432)に映るが、実際のマンズフィールド・パークは「申し分なく完璧なもの」からは程遠く、その再生には多大な犠牲が払われたことを思うとき、『マンズフィールド・パーク』は幸福な結末で終わりながらも、悲劇へと転じる要素を内に秘めた作品であると言えるのではないだろうか。

注

- (1) Austen, Jane. *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others*, ed. Chapman, R. W., Oxford University Press, 2nd ed., 1969, p.298, No.76. カサンドラ・オースティン宛, 1813年1月29日
- (2) *Ibid.*, p.376, No.92, カサンドラ・オースティン宛, 1814年3月2日
- (3) *Ibid.*, p.299, No.77, カサンドラ・オースティン宛, 1813年2月4日
- (4) *Ibid.*, p.443, No.120, J.S. クラーク宛, 1815年12月11日
- (5) *Ibid.*, p.317, No.81, フランシス・オースティン宛, 1813年7月3日
- (6) Austen, Jane. *Mansfield Park*, Oxford University Press, 1980, p.8. 以下このテキストからの引用はページ数のみを記す。
- (7) Austen-Leigh, James Edward. *Memoir of Jane Austen*, London: Century Hutchinson Ltd., 1987, pp.26-27
- (8) *Ibid.*, p.27
- (9) Austen, Jane. *The Novels of Jane Austen, Vol.III, Mansfield Park*, ed. Chapman, R. W., Oxford University Press, 3rd ed., 1988, p.474, Note on *Lovers' Vows*
- (10) Inchbald, Elizabeth. *The British Theatre, Vol.XXIII, Lovers' Vows*, New York: Georg Olms Verlag, 1970, pp.5-6, Preface to *Lovers' Vows*
- (11) *Ibid.*, p.26
- (12) Trilling, Lionel. *The Opposing Self: Nine Essays in Criticism*, New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1978, pp.185-86
- (13) Tanner, Tony. *Jane Austen*, London: Macmillan Education Ltd., 1986, p.143
- (14) *Ibid.*, p.143
- (15) Farrer, Reginald. "Jane Austen's *Gran rifiuto*" in '*Sense and Sensibility*', '*Pride and Prejudice*', and '*Mansfield Park*', Casebook Series, ed. Southam, B. C., London: The Macmillan Press Ltd., 1982, p.211
- (16) Amis, Kingsley. "What Became of Jane Austen?" *Mansfield Park, Ibid.*, p.246
- (17) Tanner, *op. cit.*, p.171